様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２４０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２０７９

研究課題名（和文）日本型メディア・ツーリズムの実証的研究と理論構築

研究課題名（英文）An empirical research and theory building on media tourism in Japan.

研究代表者
山口　誠（Yamaguchi, Makoto）

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０３５１４９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、現代日本社会における観光について、メディア研究および歴史社会学の方法論から分析し、その事例調査と理論考察を目指した。その結果として、(1) 研究期間を通じて国内外での事例調査をほぼ計画通り実施できた、(2) とくにシンガポール、マレーシア、香港における日本人の観光行動の変遷について想定以上の一次資料を収集できた、(3) これらの事例調査に基づき、現代日本社会において独自の展開がみられるメディア・ツーリズムについて理論的考察を実現できた、(4) その成果として後期観光とブーメラン・モビリティ・モデルを考案し、国内外で研究成果を公刊することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、近年の観光研究で注目される再帰性をめぐる議論を参照し、後期近代社会における再帰的な観光現象を後期観光として捉え、それ以前の観光との比較において、観光の「行き」と同等かそれ以上に「帰り」が重視される特徴を後期観光と捉えて探究した。その学術的成果は、英語による専門書の公刊、国際学会における研究発表、また国内の査読学術誌などで論文として発表してきた。さらに学術的成果の社会的還元を試みるため、事例研究の一つとして『客室乗務員の誕生』（2020年）を、またツーリズム・リテラシーという新概念を提唱する『観光のレッスン』（2021年）を、それぞれ公刊し、観光研究の成果を社会へ発信する機会を得た。

研究成果の概要（英文）：This research studied tourism phenomenon in modern Japan society with the methodology of media studies and sociology of history, in order to analyze the cases and to build theory of tourism mobilities in Japan. As a research results, this research realized (1) almost all the research plans in Japan and overseas, (2) collecting important materials about history of Japanese tourists in Singapore, Malaysia and Hong Kong, (3) based on these case studies, building a theoretical model of media tourism observed exclusively among modern Japanese society, and (4) proposing a new tourism theory of the late tourism and the boomerang mobility model, and published these research results both in Japanese and English.

研究分野：観光研究

キーワード：メディア・ツーリズム　後期観光　再帰性　ブーメラン・モビリティ　ツーリズム・リテラシー　文化的活動　レガシー　客室乗務員

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 新型コロナウィルス感染症（COVID-19）が世界的流行を引き起こす 2020 年まで、観光は 21 世紀の日本において重要な社会現象だった。とくに東京五輪の 2020 年開催が決定した 2013 年を境に、訪日外国人が年々倍増していく 2019 年までの 6 年間、観光は経済効果や産業価値だけでなく、地域アイデンティティや社会意識の再編を促す原動力となることが期待されていた。こうした 2010 年代における訪日外国人の急増に対応して、同期間にはインバウンドをめぐる観光研究が多数現れた。その一方で、日本人がおこなう観光現象、とくに国内外における新たな観光の形態をめぐる学術的考察は、十分なされてきたとは言い難い状況にあった。とくにアニメ聖地巡礼、パワースポット観光、SNS ツーリズム、「絶景」巡りなどをはじめ、数々の観光現象が新たに実践されはじめたのに対し、それらを体系的かつ実証的に分析し、理論的に解釈する枠組みを考える観光研究は、とくに日本語圏におけるメディアと関連して発生する観光現象（以下、メディア・ツーリズム）について不足していた。

(2) そうした日本の観光研究において、須藤廣と遠藤英樹による観光社会学の展開は、重要な一画期を築いた。須藤・遠藤の共著『観光社会学』（2005 年）を皮切りに、須藤と遠藤は日本語圏における観光研究、とくにメディア・ツーリズムの事例分析と理論考察において重大な学術的貢献を重ねてきた。とくに両者が試みた、再帰性概念の観光研究への導入は、本研究が参照した最も重要なテーマとなっている。本研究は須藤と遠藤による観光社会学の成果を継承しつつ、日本人がおこなう観光の特徴に着目し、おもにメディア研究と歴史社会学の方法論から新たな観光研究の実践を試みることを目的として、計画された。

２．研究の目的

本研究の代表者は、これまで平成 20～22 年度に若手研究（B）「観光とメディアをめぐる疑似イベントの実証的研究」、また平成 23～26 年度に若手研究（B）「日本型マス・ツーリズムの生成過程におけるメディアの社会的機能に関する実証的研究」の科研費を研究代表者として受け、研究活動に取り組んできた。これら 2 つの研究課題では、メディア研究と観光研究の学際的融合を試み、おもに米領グアム島をはじめとするフィールドでの事例調査に注力した。

本研究では、これまでの研究活動を継続しつつさらに高度化するため、米領グアム島を含む国内外のフィールドに着眼して日本人観光者の観光行動の比較調査に取り組むこと、そして上述した研究背景から新たな観光研究のための概念と理論的枠組みを構築することに尽力した。

とくに本研究の後半期間では、日本語圏の文化的コンテクストに根ざした理論構築を目指すとともに、その研究成果の発信（著書の公刊、学会発表、論文執筆など）を重視した。

３．研究の方法

本研究は、代表者が専門とするメディア研究および歴史社会学の方法論にもとづき、次の方法で研究活動を実行した。（１）代表者がこれまで調査してきた米領グアム島と比較可能な歴史（戦前・戦中期の日本占領統治、戦後期の日本人観光の隆盛、日本人渡航者数の推移統計、の 3 点）を有する香港、シンガポール、マレーシアにおける現地調査をおこない、観光現象において歴史性が有する社会的機能を通時分析すること、（２）とくに戦争の記憶が戦後の日本人観光において果たした機能について、新聞・雑誌・ガイドブックなどのメディア言説をもとに実証的な分析を試みること、（３）現地の中央図書館や大学などで保存された観光開発の基本計画の一次資料や、その概要や実状を伝えるメディア言説などを収集し、日本人のメディア・ツーリズムにおいて顕著にみられる特徴を比較分析すること。

これらの現地調査と連動して、重要文献の読解と理論的考察も並行しておこない、国際的な観光研究の潮流を理解するとともに、日本人観光者に独特な観光現象の分析を試み、とくに日本型メディア・ツーリズムの現象において有意に観察できる特徴を明らかにするため、オンライン・データベースなどを駆使して国際ジャーナルに掲載された学術論文を入手してその理解に努め、比較する検討を進めた。

こうした現地調査と理論考察によって収集した資料に基づき、本研究はその通時分析と理論枠組みの構築に取り組んだ。

４．研究成果

本研究の成果とその課題は、つぎの 5 点にまとめられる。

(1) 「観光地」中心から「移動」の歴史へ

これまでの観光研究では、特定のフィールドを定めて調査を進めていく「観光地」中心の研究が主流を占めてきた。これに対し近年ではモビリティ研究が注目を集め、移動する行為、プ

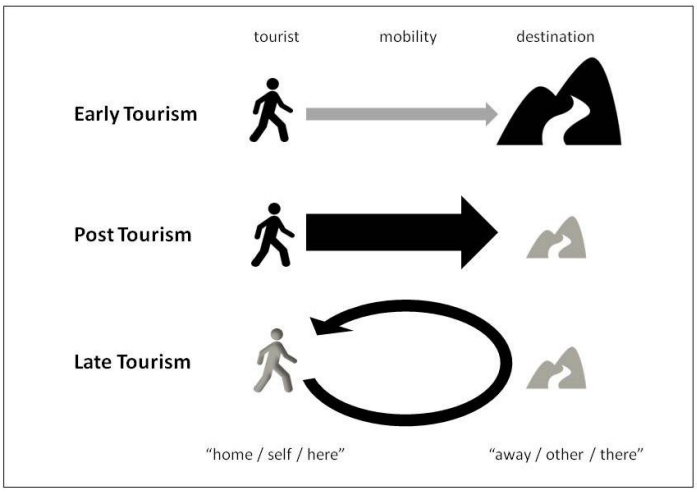
ロセス、その主体性をめぐる、新たな研究蓄積がなされている。このことから本研究では「移動する主体」としての航空会社の客室乗務員に着目し、新聞やテレビや雑誌などのマス・メディアにおいて「客室乗務員」がどのように言説化され、また社会的な機能を期待されてきたのかを通時分析した。モビリティ研究において通時分析に取り組む研究は、国際ジャーナルなどで多くみられる一方、日本の事例に着目した研究および日本人研究者による研究は極めて数が少なく、とくに「移動する主体」としての客室乗務員の歴史に着目し、日本型メディア・ツーリズムの言説を歴史社会学の方法から分析した研究成果は、皆無に等しかった。この成果の一部は、『客室乗務員の誕生』（岩波書店、2020 年）として出版し、またいくつかの学会で成果発表をおこなった。

(2) ツーリズム・リテラシーの理論的構築

メディア・ツーリズムを問う本研究は、メディア研究において一領域を積み上げてきたメディア・リテラシー論に注目し、なかでも 2000 年代の日本において独自の研究活動を展開してきた東京大学メルプロジェクトの研究成果を参照した。その結果、観光分野におけるリテラシーの研究と開発を構想し、「ツーリズム・リテラシー」という新たな概念を構築するに至った。これまで観光は、レジャーあるいは余暇活動の一種として捉えられてきた一方で、エコ・ツーリズムやボランティア・ツーリズムやダーク・ツーリズムなど、従来の「楽しみのための旅行」という狭義の定義では捉えきれない観光現象が、多数現れている。本研究ではこれらの新たな観光現象を着目し、それらに通底する「観る」技法としてのツーリズム・リテラシーに着眼して、メディア・リテラシー論を参照したツーリズム・リテラシー論の理論的構築を試みた。その成果の一部は、『観光のレッスン――ツーリズム・リテラシー入門』（新曜社、2021 年）などの著作で発表し、複数の学会や研究会で成果発表をおこなった。

(3) 後期観光論と再帰的観光の理論構築

本研究では 5 年間の研究期間を通じて複数の国際学会および研究会に参加し、また国際ジャーナルに掲載された最新の観光研究の動向をとらえた結果、海外の事例との比較において日本のメディア・ツーリズムに独自な状況と作動原理を探究することができた。その成果の一つとして「ブーメラン・モビリティ（再帰的な観光移動の体験モデル）」を提起し、英語による共著 *Understanding Tourism Mobilities in Japan*（Routledge, 2020 年）において ”Late tourism and ‘ boomerang ’ mobility in Japan ’ として発表することができた。ブーメラン・モビリティとは、観光の行先である「観光地」ではなく観光の移動体験そのものを求めるモビリティであり、それは後期観光の時代においてさまざまな事例において観察できる、日本に独自の観光のかたちである。



(4) 再帰的観光体験とレガシー化

上述したブーメラン・モビリティの理論枠組みを援用し、日本国内における観光行動を事例分析することを、研究期間を通じて継続して取り組んだ結果、とくに香港、シンガポール、マレーシアの 3 地点において歴史と観光が独自の関係性を取り結び、再帰的観光体験の重要な駆動力（エンジン）になっている状況を、発見することができた。これらの発見を理論化するため、本研究では「レガシー化」という概念を構想し、記憶研究およびノスタルジア論の先行研究を参照して概念の整備を進めつつ、フィールドにおける事例の収集を試みた。その成果の一部は 2019 年の日本コミュニケーション学会などで発表できたが、しかし翌 2020 年の新型コロナウィルス感染症の世界的流行のため、上述した 3 地点への現地調査を断念し、「レガシー化」の実証的研究は未着手のまま現在に至っている。これが現時点の最も大きな課題である。

(5) 得られた知見と今後の課題

本研究の成果は、これまで著作、論文、学会報告で発表し、また新聞雑誌の記事や公開研究会などでも公開し、できる限り広く日本社会へ届けられるよう努力してきた。とくに研究期間の最後の 2 年間には、複数の著作を公刊し、Routledge 社の共著をはじめとする英語論文を発表し、また国際学会に参加して英語で研究成果を発信するとともに、海外の観光研究者たちとの研究交流に努めてきた。

そのうえで、新型コロナウィルスの影響により国内外での現地調査が不可能になり、とくに研究期間の後半に発見した「戦争の記憶のレガシー化」と再帰的観光体験（ブーメラン・モビリティ）の日本型展開という研究テーマについて、十分な調査も考察もできなかったことが、重大な課題として残ることになった。

この「レガシー化」については国内の事例において調査を計画し、たとえば近代化の象徴であり、環境破壊と非効率的な遺物として廃止された SL（蒸気機関車）が、現在では日本各地の観光資源として復活し、「レガシー」として人気を集めている状況をめぐる研究において理論的構築の作業を進めている。他方で、本研究の研究テーマである日本型メディア・ツーリズムにおいて、「レガシー化」は重要な成果となる可能性があるため、それを発見した香港、シンガポール、マレーシアの 3 地点をはじめとするフィールドを再訪し、現地における事例分析とこれまでの成果に基づく理論的考察に取り組み、さらなる研究の深化を今後試みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山口誠	４．巻 1
２．論文標題 モビリティはメッセージである――「ラースン・インパクト」へのまなざし	５．発行年 2016年
３．雑誌名 観光学術学会第5回大会発表要旨集	６．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口誠	４．巻 5巻1号
２．論文標題 「観光のまなざし」の先にあるもの――後期観光と集合的自己をめぐる試論	５．発行年 2017年
３．雑誌名 観光学評論	６．最初と最後の頁 111-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 山口誠
２．発表標題 「観光、メディア、コミュニケーション」
３．学会等名 日本コミュニケーション学会 第49回年次大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口誠
２．発表標題 The past as a tourism resource: Legacy, heritage, and memory in contemporary Japan.
３．学会等名 2nd International Conference of Critical Tourism Studies Asia Pacific（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口誠
２．発表標題 観光から社会を観る―ツーリズム・リテラシーの可能性
３．学会等名 日本観光ホスピタリティ教育学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山口誠
２．発表標題 ツーリズム・リテラシーという考え方
３．学会等名 公益財団法人日本交通公社・第12回たびとしょcafe（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山口誠
２．発表標題 モビリティはメッセージである――「ラースン・インパクト」へのまなざし
３．学会等名 観光学術学会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計7件

１．著者名 監修：荒山正彦、執筆：山口誠・福永香織・大隅一志	４．発行年 2020年
２．出版社 ゆまに出版	５．総ページ数 278
３．書名 『ジャパン・ツーリスト・ビューロー　ツーリスト　大正編　別巻』	

1．著者名 石森大知・丹羽典生編著	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 368
3．書名 太平洋諸島の歴史を知るための60章	

1．著者名 山口　誠	4．発行年 2020年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 252
3．書名 客室乗務員の誕生	

1．著者名 遠藤 英樹、橋本 和也、神田 孝治	4．発行年 2019年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 288
3．書名 現代観光学（執筆分担：山口誠「メディア」および「ガイドとナビ」、pp.95-103およびpp.193-201）	

1．著者名 山口誠	4．発行年 2017年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 289
3．書名 「第5章　鏡の無い部屋」　柿田 秀樹・若森 栄樹編『〈見える〉を問い直す』	

１．著者名 山口 誠、須永 和博、鈴木 涼太郎	４．発行年 2021年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 194
３．書名 観光のレッスンーーツーリズム・リテラシー入門	

１．著者名 Hideki Endo, et al	４．発行年 2020年
２．出版社 Routeldge	５．総ページ数 207
３．書名 Understanding Tourism Mobilities in Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関